

## 続「子、親を選べず」その二 改編版



「おとうの言う事まともにききよったら、いい目は見られん」

と思っっている真之介君は最近、多少内心の揺れはあったものの、お父さんの話を、大抵は「いなし」「かわし」の「うっちゃり」で外に弾き出す様にしましたが、ある時、お父さんが面と向かってこんな事を訊いてきました。

日本の人はお父さんの事を大概スルーするので、結構真之介君にお鉢が回ってくるのです。

「真之介、お前だけやねえが、一体全体己らは、何をそうビクビクして暮らしとおのや？あん？なんでや？いうてみ」

之には、真之介君も参りました。

余りにも唐突で且つ的を突いていたからです。

それでも真之介君は、動揺を隠しながらろうじて

「何やの？突然。何のこっちゃ？よう分らんが」と返しました。

「わいからすると、老若男女、皆、なんか怖じ気づいとおいいうか、臆病風に吹かれとおいいうか、肚も腰も浮き足立つとる様にしか、みいへんのやが」

「そねえな事はないわ。おとうが、勝手気儘すぎるだけの話と、ちやうんかい？」

「己らがビクビクしとおのは「過剰付度」のせいや。付度のしすぎや」

「そんなくう？って、なんやの？ドンタクなら知つとおが」

「言われも、頼まれもせんのに、気を回しているいろする、こっちゃ。あるいは、せん、こっちゃ。

見た処、うちらは、政治家と言わず一般ピープルといわず、あらゆる人が日常茶飯事、行住坐臥、夜を日に継いで、この「付度のプレゼント合戦」と「相手から受ける付度の値踏み合戦」を日々、街中のあちこちで展開している様な気がするわ。之じゃあ疲れるし、付度なんぞという曖昧極まりない物に、全ての土台を置いているとすれば、不安と恐怖でビクビクにも、なるわなあ。

国民皆保険じゃのうて、国民皆付度の蟻地獄やで」

学校の勉強が大嫌いな真之介君は家に帰ってまで国語の授業なんか受けなくなかったので、

ここは八卦に逃げるにしかずとばかり、本当は「ゲームをしに」だったのですが

「おとうのインチキ国語、なるても、学校で役にたてひんさかあ、二階でお宝ビデオでも見るわあ」

と、ハツタリをかますと、お父さんは

「おっ、いつの間にか成長しおったな、真之介」

と上手（うわて）を繰り返してきました。

いやいや、上手などと言う高等技術ではなく、どうやら本心の様です。

またぞろここから別の話に飛火して、地滑りの時間拘束の、それこそお父さんの言う「蟻地獄」に吸い込まれては堪らないので真之介君は思わず

「ほな、上がるわ」

と時限タイマーを強制発動させて、さっさと二階に上がってしまいました。

そこでふと

「おとうこそ、あれで中々『変形』付度強要ビームをおかんの後ろから毎日撃ちまくったのが、おかんトンスブラ原因の一つかも」

と思い

「付度からかどうかは「？」やが、おとうも含めて後ろから相手、チョロ見のスパイ駆引き合戦があるのはピンポンかも」

と推理中の探偵の様に頷きました。